

教育カウンセラー

JECA JSEC

CONTENTS

巻頭言・諸富祥彦	1
コロナウイルスへの取り組み	2
学会第18回研究発表大会案内	3
私の研究シリーズ⑲・森永秀典	4
学会紹介シリーズ②⑤・PAC分析学会	6
実践研究シリーズ②⑦・佐々木雄一郎	7
TEPRO Supporter Bank 人材登録のお知らせ	9

【ご報告】教育カウンセリングCollege in 秋田 10

【活動報告】日本教育カウンセリング学会 11

巻頭言

教育カウンセリングのエッセンス

——つねに「少数派の視点」からものごとを見る。寄り添う。守る。

明治大学文学部教授
諸富 祥彦



「教育カウンセリング」のエッセンスとは何でしょうか。教育カウンセリングを学んだ教師はそうでない教師と何が違ってこなくてはならないのでしょうか。次の5点だと私は思います。

- 1 つねに少数派（弱者）の視点から、ものごとを見る。寄り添う。守る。
- 2 そうした人が、援助希求（help-seeking）できる工夫をする。
- 3 発された小さな弱い声に、じゅうぶんに耳を傾ける。傾聴する。
- 4 待つだけでなく、こちらから、リレーション（ふれあい）を積極的につくっていく。
- 5 「個」と「集団」の両方の視点を同時にもつ。

最近私が危惧しているのは、予防的観点から集団での心理教育などを充実させる流れのなかで（それ自体は価値あることとしても）、ともすれば、カウンセリングを学んだ方のなかでも、「個」の視点、「少数派の視点」が抜け落ちてしまいがちになることです。すると内実は従来型の規律重視の教育とあまり変わらなくなってしまいます。

カウンセリングが1980年代から2000年にかけて広

まっていった20年は「個」を大切にする姿勢が輝きを放っていました。集団優先の日本文化にあって、カウンセリングの「個」を大切にする姿勢はインパクトがありました。その後の20年、2000年から2020年は、構成的エンカウンターやソーシャルスキル、社会性のプログラムなど「集団」を対象にしたカウンセリングが広まりました。それは予防や成長支援といった大きな意味があり、私もその普及に尽力しました。

しかしそのなかで、ともすれば、「つねに少数派（弱者）の側からものごとを徹底的に見る」「寄り添う。守る」という「カウンセリングの原点」とも言うべき視点が抜け落ちてしまいがちになってはいないでしょうか。

これは、カウンセリングの世界のなかで静かに進行している大きな喪失であり、危機です。

不登校の子、いじめられている子、LGBTの子、発達や愛着の問題を抱えた子、貧困に苦しむシングルマザー、メンタル不調の教師……、こうした「少数者」の視点に徹底的に寄り添う。守る。

たとえば、教室に入れない子であれば、何とか別室を用意し、そこで充実した時間を過ごせるよう、その子だけのためのプリントを用意する。「教室に入れないなら、学校に来る必要はない」などと声高に言う教師と戦う。そうした教師からその子を守る。

クラスの33名のためにあるエクササイズが有効だと思っても、そのエクササイズが残り1名を傷つけるリスクがあるならば、それは捨てる。やらない。

たとえ非効率的で、時間やエネルギーをよぶにとられることであっても、こうした「少数派の視点に立つ」「寄り添う。守る」という視点をとれないのであれば、カウンセリングの存在意義はない。いくら技術や理論を学んでも、カウンセリングを学んだことにならない。私はそう思います。

コロナウイルスによる学校閉鎖からの 新学期に向けて

2020年3月22日

北海道教育カウンセラー協会 S G E 担当理事

瀬尾 尚隆

1 はじめに

「コロナ疲れ」という言葉があちこちで聞かれます。3月22日現在、修了式や離任式は分散形式で、時間も通常の修了式の時程ではない学校が多いと思います。つまり、しっかりとお別れができない。学年や学級に想いを持っていることがあっても、引きずっている子がいることが予想されます。

このことを踏まえながら、新年度の学年や学級開きを考えるべきだと思います。

また、収束の方向に向かうと思いますが、コロナウイルスに対する対策は、忘れてはならない事です。昨日まで、しつこく言っていたことが、急に全く問題ないにはなりません。

これらのことを考えると、通常の学級開き（出会いと関係づくり）に加えて、ストレスへの対処、過去にとらわれている気持ちを、未来志向に変えていくことを丁寧にしていかないとはいえないと考えています。

2 実践上、気をつけること

学級開きのエクササイズでは、握手をしたり、お互いの身体接触をすることで、心的距離を縮めていく発想のものが多くありますが、感染対策としては、難しくなります。例えば、握手はNG→お互いのひじタッチやアイコンタクトに変更する、など。ポイントは、あちこちから示されている感染症予防対策を考慮しているかです。

また、自分の担当する学年・クラスの状況（持ち上がり・学級解体後・担任のみ変更など）を考慮していくことも必要です。それぞれの置かれている状況を考えながら、柔軟にいきましょう。

3 最後に

4月の状況が見えない中、方針が二転三転して、落ち着いて準備もできない状況ですが、こんな時こそ、同じように悪戦苦闘している仲間がいるんだということを忘れずに、子どもたちが早く普通に笑顔で生活できる学校にしていければと思います。

新型コロナウイルスに対しての北海道支部の取り組み(小冊子発刊)について

北海道教育カウンセラー協会代表 大友 秀人

北海道は、新型コロナウイルスの感染広がりで、2月28日「緊急事態宣言」を出し、週末の外出控えの呼びかけ、学校の休校措置も全国に先駆けて行いました。

社会的な不安の影響が、子どもたちだけではなく、大人たちにもあると感じ、急遽、新型コロナに対してのWG（CVPWG：コロナウイルス予防ワーキンググループ）を結成し、「歩きながら考えよう」をモットーに、まず、私が3月10日付で「緊急メッセージ」を、S G E 担当理事の瀬尾尚隆さんが3月23日付で「新学期に向けて」で全道の仲間に呼びかけました。

それと同時並行で、事務局長の吉田ゆかりさんが、支部のHP（<https://www2.hp-ez.com/hp/hkk/top>）にS G E の実践記録のコーナーを設置しました。いま行える、また4月、5月で行えるS G E の実践記録をスペシフィックS G E アドバイザーに呼びかけて募ったところ、伊藤友彦さんを中心に、即座に多くのエクササイズが寄せられ、それらを随時HPにアップしてきました。今回、それを1つの冊子にしました。[追伸]メールのやり取りだけで、これだけの作業を短期間に進められたのは、これが形になれば、多くの仲間を勇気づけることができるの思いがあったからです。感謝です。支部のHPからダウンロードできます。全国の皆さん、共に頑張りましょう。

●ご案内● 日本教育カウンセリング学会 第18回研究発表(秋田)大会

【大会テーマ】
学ぶ力と生きる力の統合を支える教育カウンセリング
——子どもの真の学力の形成をめざして——

荻間澤勇人(会津大学文化研究センター教授)

日 時：2020年11月22日(日)・23日(月)

会 場：秋田大学

記念講演：「子どもの学ぶ力をどう高めるか——授業方法と授業方略の視点から」(仮題) 市川伸一先生(東京大学名誉教授)

公開シンポジウム：「真の学力の形成を支援する」

総括討論：河村茂雄(本学会理事長)

自主シンポジウム・研究発表・ミニ研修会

会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日本教育カウンセリング学会第18回研究発表(秋田)大会を、2020年11月22日(日)・23日(月)の両日、秋田大学で開催するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

秋田県は、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」において、全国トップレベルを維持しており、現在、「教育立県あきた」を目指しております。その本県において、本学会第18回研究発表大会を、「学ぶ力と生きる力の統合を支える教育カウンセリング——子どもの真の学力の形成をめざして」をテーマとして開催できますことをとてもうれしく思います。また、ご参加くださる皆様に心から歓迎いたします。

前回、第17回(早稲田大学)大会では、教育カウンセリングが授業改善とインクルーシブ教育の両立を目指すことを確認して、教育カウンセリングの広がり発展を確信しました。今回、第18回(秋田)大会では、さらに一歩進めて、教育カウンセリングが学ぶ力と生きる力の統合にどのように貢献できるかを検討したいと考えます。

さて、本県の子どもたちは、「全国学力・学習状況調査」の「学習に関する質問項目」への肯定的な回答も全国平均を上回っております。これは、2020年度に小学校から順次、全面実施される新「学習指導要領」で示された「確かな学力」の一つの要素である「主体的に学習に取り組む態度」にかかわっています。学習に主体的に取り組むためには周囲の適切な支援が必要です。どのような支援が有効であるかを、本発表大会を通して明らか

にしたいと考えます。

本大会の主なプログラムは、22日(日)午後からの記念講演において、市川伸一先生(東京大学名誉教授)に「子どもの学ぶ力をどう高めるか——授業方法と授業方略の視点から」(仮題)のタイトルでご講演いただきます。また、公開シンポジウム「真の学力の形成を支援する」では、秋田県在住の学会員に話題提供を、河村茂雄(本学会理事長)に総括討論をお願いしました。さらに、自主シンポジウムや研究発表、ミニ研修会を例年どおり開催いたします。

研究発表大会は、会員の皆様の実践報告や研究の発表の場です。積極的な御参加により、大会を盛り上げてくださいますようお願いいたします。さらに、1日目の夜には、会場を秋田駅前「イヤタカ」に移して、会員相互のネットワークを広げる情報交換会を開催いたします。皆様と楽しいひとときを共にしたいと思っております。

秋田支部一同は、教育カウンセラー協会の支部として力不足ながら、本大会をお引き受けしたことを誇りに思っております。2年半にわたり協力して準備してきました。多くの皆様に御参加いただき、美しい風景とおいしい食べ物を堪能していただきながら、本大会が盛大に開催され、教育カウンセリングの発展に貢献できればと願っております。

最後になりましたが、大会運営の準備にあたり、学会理事長・理事の皆様、関係者の皆様に多大なお力添えをいただいております。衷心よりお礼の言葉を述べさせていただきます。誠にありがとうございます。引き続きよろしくお願い申し上げます。

11月には、美の国・秋田に“きてけで～”
“まってんど～”



私の研究シリーズ 19

学級集団の力を高めていくプロセスとは

金沢星稜大学 森永 秀典

I 私の教育実践の支えとなったQUの知見

私は小学校の学級担任として学級集団づくりを核とした教育実践を行ってきました。そうした中で支えとなったのは、QUに関する研究によって積み上げられた、数々の理論と実践の知見です。大学においてこうした知見を密に学ぶことができたお陰で、日々の教育実践を俯瞰し、適切な対応策を模索しながら、実践し続けることができました。

「自分自身が悪いのではなく、対応策がマッチしていないだけ。であれば落ち込まず、対応策を変えればいい」

「問題がないのではない、見えていないだけ。早期発見、早期対応。予防・開発的な教育実践の実施」

「学級集団の停滞は退化である」

「感情の交流は促進されているか、思考の交流の活性化にまで至っているか」

「リーダーシップを育て、フォロアーシップを育てる集団づくり」

こうしたQUの知見が発信する数々のメッセージに励まされながら、私なりに学級集団の力を高めるプロセスのイメージをつかむことができたのではと思っています。

II 「理想の学級」のイメージ

「理想の学級」とは一体どんな学級なのか。多くの先生方はここに大きな疑問をもっているように思います。理想の学級のイメージが各教員によって異なることで、「各学級に合わせ、各学級担任のよさを発揮しながら、各学級担任の理想とする学級像を目指す」

という暗黙の了解の中で、学級経営がなされていることが多いのではないかと感じています。

これは個々の教師の専門性を尊重するという意味で浸透してきた考えであったかもしれません。一方でそうした学級の理想のイメージを各学級担任に丸投げし、その

イメージの差を個性とすることで、学級担任の孤立を生み、教師の仕事の個業化を益々増大する結果となってしまった側面もあるように思います。

III 学級集団の発達に合わせた教師のリーダーシップ

学級集団の力を高めていくためには、理想の学級集団に向かって、学級集団の発達に合わせ、段階的に創り上げていく取り組みが必要だと私は感じています。学級集団の発達は直線的に進んでいくものではないとは思いますが、どこに向かうのか、どのような段階を経ていくのかについては、確かなイメージをもって教育活動にあたるのが大切だと考えています。

河村（2012）は、「学級集団は、児童生徒の間の相互作用、インフォーマルな小集団の分化、児童生徒と教師との関係、それらの変化により、集団内外の雰囲気や児童生徒の学級や教師に対する感情、行動傾向などに状態の変化が起こり、このような学級集団の状態の変化を、『学級集団の発達過程』と呼ぶ」としており、学級集団の発達段階を示しています。そして理想の学級集団として、学級のルールが児童生徒に内在化され、一定の規則正しい全体生活や行動が、温かな雰囲気のなかで展開される状態にある「自治的集団成立期」に至ることが示されています。

そこで、河村（2009）が示している、学級集団の発達段階ごとに発揮することが望ましいとされる教師のリーダーシップを挙げながら、私自身が自治的集団成立期という理想の学級に向かって、具体的にどのような考え方で教育実践を行ってきたか、紹介したいと思います。

1 混沌緊張期

学級編成直後の段階で、児童同士に交流が少なく、学級のルールも定着しておらず、一人一人がバラバラの状態に留まる段階（時期）です。学年初めの子どもたちは、緊張と不安のなかに身を置き、傷つかずに過ごすための方法を探しながら過ごしている状態であると私は考

えています。学級は一見落ち着き、問題もなく日々の活動が進行していきますが、学級集団が発達するかさらに退化するかの分かれ道となる状況です。

このように問題が表出しない状況においても、積極的に児童らの不安解消に取り組み、共に向き合い、人間関係を広く深く構築していく準備ができるかどうか、学級集団の力を高めていくうえでの最初のプロセスであると考えています。

河村（2009）は、この段階の学級集団に適切な教師のリーダーシップを【教示的な対応】としています。教示的とは、「1つ1つやり方を教えていくこと、手本を示してやり方を理解させていくこと」です。教育活動を細かく分け、「まずはこれを」「次にこれを」という、1指示1行動の様式をとることで、何をすればいいのかの見通しがもて、活動に対する抵抗が少なくなります。

教示的なリーダーシップの発揮がうまい教師は、児童の行動を統制する力量が高く、叱責や抑圧することなしに、児童の行動をスムーズに促すことができます。しかしながら教示的なリーダーシップに偏っていると、ある程度は児童の安心感を高める効果はありますが、徐々にやらされ感が募り、活動に対する意欲が減退してしまうことも想定しておくことが大切です。

2 小集団成立期

子どもたちが自分のグループ内だけで固まり、独自の行動をしている学級集団の段階です。この段階では、3～4人の小グループが乱立し、それに入れない子どもたちが孤立傾向にあるなど、集団としての成立が不十分な状態です。固定的な小グループであっても、安定して仲良く活動している状態を見ると、教師は安心してしまいがちです。しかし、その状況でさらに人間関係を広げ深めていくか、それともこのままの状態の維持に留まるかで、学級集団がさらに発達していくか、停滞そして退化していくかの分岐点となっています。

河村（2009）は、小集団成立期における適切な教師のリーダーシップを【説得的な対応】であるとしています。「説得的」とは、その活動や活動をする際のきまりの意義を児童に納得させることを重視するリーダーシップです。児童が「なぜこの活動を行うのか」を自ら納得して活動することで、教師の指示に従うのではなく、教育活動の目的を意識した活動として取り組むことができるようにします。

教師からの説得は、わかりやすく、時にユーモアも含めながら伝えることが有効です。自己開示をしながら活動のむずかしさを共有してもよいと思います。例えばチャイム着席の場面では「周りが座っているから座っている」、「先生に指導されるから座っている」という児童もいるかもしれません。そこでチャイム着席ができていない時とできている時では、授業の開始5分にとの異なる違いがあるかを伝えたり、児童と何が違うか一緒に考えたりすることが有効です。

また教師自らが「チャイムが鳴ってから準備すると、こんな失敗や間違いを起こした」というエピソードを伝えてもいいかもしれません。できていないことだけでなく、できていることを強化するフィードバックを行うことで、より高い効果が得られると思います。

3 中集団成立期

いくつかの小グループが連携できる状態にあり、それらのグループが中心となって、全体の半数の子どもが一緒に行動できる学級集団の状態です。小グループの連携を自然発生的に待つのではなく、共通の目標を与え、協同的に取り組ませていくなかで、小集団から中集団でも活動できるように促していきます。

集団が大きくなればなるほど、意見を伝えることに対して抵抗が大きくなったり、意思決定がむずかしくなったりします。そういう抵抗やむずかしさを、教師が中集団のいちメンバーとして参加しながら、リーダーシップをとっている子どもたちをさりげなくサポートして、集団のまとまり、活動の推進を陰で支えています。

このように中集団成立期の学級集団の状態において、河村（2009）は【参加的なリーダーシップ】の発揮が適切であるとしています。すでにこの段階では、基本的な学級のルールと人間関係は安定した状態です。そのなかで、さらに学級集団の発達を高めることを求め、児童と共に学習活動に参加しながら、教師がうまくできていることをフィードバックしたり、一つレベルの高い課題を乗り越えられるようなサポートをしたりすることを繰り返すことで、徐々に小集団成立期から中集団成立期へと移行していきます。

4 自治的集団成立期

子どもたちに学級集団の一員としての自覚があり、自分たちで工夫して、全員で一緒に行動できる学級集団の

状態です。とは言うものの、普段から全員でまとまって活動しているわけではなく、中集団の親和的なかわりのなかで過ごすなかで、協力すべきときは集団の隔たりなくかわることのできる状態です。

そのような学級集団の状態において、河村（2009）は、【委任的なリーダーシップ】の発揮が適切であるとしています。委任的なリーダーシップを発揮する際には、児童に活動の運営を任せ、70%くらいのゴールを成功と考えます。

ここで意識するのは、「委任」と「放任」の違いです。委任的なリーダーシップを発揮する場合には、児童が、活動の手順、目的を理解し、相互に協力できるレベルにあるかどうかの見取りが重要です。そして活動後に、できていたところはどこか、より成果のあがる活動のあり方は何か等、適切なフィードバックを行うことで、次の活動につなげていきます。

ただ活動を自由に任せるものではありません。私は自治的集団成立期に至った学級集団には、「葛藤」をキーワードとして個々を鍛えるイメージで教育実践に臨みます。日ごろ行っている活動のなかにある修正点や改善点を意識し行動する、そして失敗を糧として、次の行動につなげる。そういった学習活動を繰り返すことで、自治的集団成立期に迫っていくことができると考えています。

Ⅳ 最後に

学級集団が高まるごとに、教示的・説得的・参加的・委任的なリーダーシップを学級集団の発達に合わせて発揮していきます。その際には、「どのリーダーシップを発揮するのか」ではなく、「どのようなバランスでリーダーシップを発揮するのか」という視点が重要であると思います。「今の学級集団にマッチした対応策は何か」この考えのもと、学級集団づくりの経験を積み重ねることで、教師自身の学級集団を育成する力が高まっていくと考えています。

【参考文献】

- 河村茂雄・藤村一夫・浅川早苗『Q-U式学級づくり——小学校高学年——』図書文化、2009
- 河村茂雄『学級集団づくりのゼロ段階』図書文化、2012

学会紹介シリーズ25

PAC分析学会

PAC分析（個人別態度構造分析）は、内藤哲雄学会会長（前信州大・福島学院大学／現明治学院大学国際平和研究所所員：社会心理学・臨床心理学）によって発明・開発された新しい研究法です。質的分析と多変量解析（クラスター分析）を組み合わせ、研究者と研究協力者（いわゆる被験者）の対話を重視した、個人の態度構造を明らかにする研究法です。

2006年にPAC分析学会が発足しました。また2016年に学会ホームページが発足しました。

<https://pacanalysis.jimdo.com/>

2017年に学会誌『PAC分析研究』が発刊されました。学会のホームページで無料ダウンロードが可能です。また、無料でPAC分析に関するメーリングリストも運用しています。ご希望の方は、

take@wako.ac.jp

の伊藤武彦までご連絡ください。

毎年12月に、学会の大会を行っています。これまでの大会実施は以下のとおりです。

- 第13回大会（2019年12月：金沢工業大学）
- 第12回大会（2018年12月：立命館大学 朱雀校）
- 第11回大会（2017年12月：日本保健医療大学）
- 第10回大会（2016年12月：山陽学園大学）
- 第9回大会（2015年12月：日本女子大）
- 第8回大会（2014年12月：福島学院大学）
- 第7回大会（2013年12月：和光大学）
- 第6回大会（2012年12月：金沢工業大学）
- 第5回大会（2011年12月：国際基督教大学）
- 第4回大会（2010年12月：横浜国立大学）
- 第3回大会（2009年12月：明治学院大学）
- 第2回大会（2008年12月：東邦大学）
- 第1回大会（2008年3月：和光大学）

以上の論文抄録もPAC分析学会のホームページからダウンロードが可能です。

PAC分析支援ツールとしてホームページで公開されているのは、(1) パックアシスト、(2) パックヘルパー、(3) デンドログラム（樹形図）作成の方法（R, SPSS, HALBAUによる）です。

PAC分析に興味をもたれた方は、まずはじめに、内藤哲雄『PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待』（ナカニシヤ出版、1997）を読まれると良いと思います。（文責：いとうたけひこ）

実践研究シリーズ—27

共に創り上げる授業を支える学級集団づくり

——Q-Uと構成的グループエンカウンターを生かして——

福島県公立小学校教諭 佐々木 雄一郎

キー・ワード：共に創り上げる授業，学級集団づくり，Q-U，構成的グループエンカウンター（SGE）

【問題と目的】

本校では、「自分に問いかけ 進んで考え行動する
心も体も健康で明るい子ども」を教育目標とし、
「学力向上」
「コミュニケーション能力の育成」
「児童支援の充実」
の教育課題を掲げ、教育活動に取り組んでいる。

本校は家庭環境や成育歴等，多様な子どもが在籍しており，授業中の離席やいじめなど，生徒指導上の課題もままあるのが現状である。また，授業では，子どもたちの問いをつなぎながら実践を重ねているが，単発な発言はあっても，話し合いの広がりには課題を感じていた。

平成28年度のQ-Uの結果をみると，学校全体での学級生活満足度は44%（6月時点）であった。そこで，Q-Uの分析と構成的グループエンカウンター（以下，SGEと表記）の取組みを生かし，よりよい学級集団の人間関係づくりに取り組むことにした。

【方法】

(1) Q-Uの実施と分析

① 実技研修会

学級開きに対する心構えや効果的なエクササイズ，第1回のQ-U実施までに大切なポイント等について，会津大学の荻間澤勇人教授にご指導いただく。

② 学級づくりの実践（1学期）

ルールの定着とリレーション形成のための実践，見直し，改善のサイクルを回しながら，教育活動に取り組む。

③ 第1回 hyper-QU（5月下旬）

生徒指導と連携を図り，シートを活用しながら，調査当日のうちにいじめ，不登校に関する項目のチェックをする。また，注意が必要な児童には必ず声かけを行う。

④ 第1回分析会

荻間澤先生より，Q-Uの分析方法と，今後の方針についてご指導いただく。

⑤ 学級づくりの実践（2学期）

Q-Uの結果に基づいて実践，見直し，改善に取り組む。

⑥ 第2回 hyper-QU（11月上旬）

第1回と同様に行う。

⑦ 第2回分析会

第1回同様，分析を行い，今後の方針を立てる。

⑧ 第3回 Q-U（2月下旬）

1年間の学級集団づくりの成果を確認して，次年度へつなげる。

(2) SGEの実施

毎週火曜日に8:30～8:45の15分間を「ハッピータイム」として位置づけ，構成的グループエンカウンターの活動に取り組んだ。「こころとあたまを温める時間」をキー・ワードにしたモジュール学習の一つとして実施した。また，ハッピータイムは，基礎的なコミュニケーションスキルを高めるとともに，学級への所属感や自己肯定感を高め，よりよい学級づくりへとつなげることをねらいとした。そのため，SGEの活動にソーシャルスキルトレーニング（SST）の要素を取り入れた。ソーシャルスキルを身につけて，それがすべての子どもの学級における行動の「型」となることを目指した。なぜなら，「型」どおりに振る舞うことで，学級において不安を感じることが少なくなるからである。

SGEの実施に当たっては，報告者が進行役となり，実施前日に打ち合わせを行い，実際に教師間でエクササイ

ズを実践して、構成する際のポイントを確認して取り組んだ。実施したエクササイズは以下のとおりである。

実施したエクササイズ例

学 期	ねらい	具体的エクササイズ
1 学期	リレーションづくり	・アウチ ・足じゃんけん ・バースデーサークル ・あわせアドじゃん ・質問じゃんけん
2 学期	相互理解の促進	・いっしょにたとう ・〇〇ビンゴ！ ・どんな絵だったかな？ ・インパルス
3 学期	自己肯定感の育成	・サイコロトークング ・4つの窓 ・いいところ、みつけた ・学級への花束（6年生）

國分・國分（2004）エンカウンター事典を参考にした。

【結果】

(1) Q-Uの結果から

① 学級生活満足群の割合の増加

図1は、平成28年から平成30年までの学級生活満足群の割合の変化を表している。Q-UとSGEを生かした学級集団づくりに取り組み始めた平成29年度から、満足群の割合が増加している。平成30年度には、全校児童の7割が学級生活満足群に属しており、約9割の学級が「満足型学級」に達している。

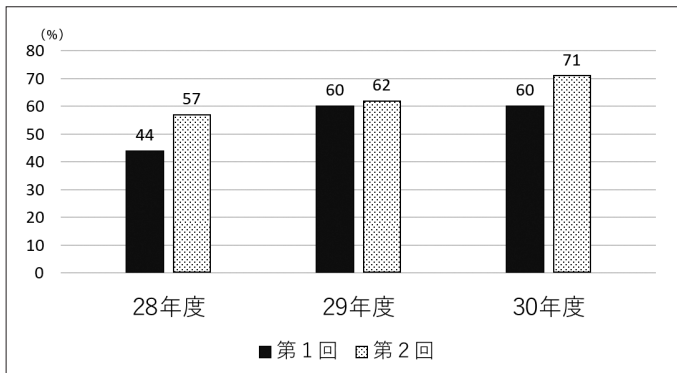


図1 学級生活満足群の割合の変化

② 学級生活不満足群の減少

図2は、平成28年から平成30年までの学級生活不満足群と要支援群の児童数の変化を表している。左側が

1回目、右側が2回目の結果である。1回目よりも2回目、また、年度を追って不満足群と要支援群の人数が減少している。

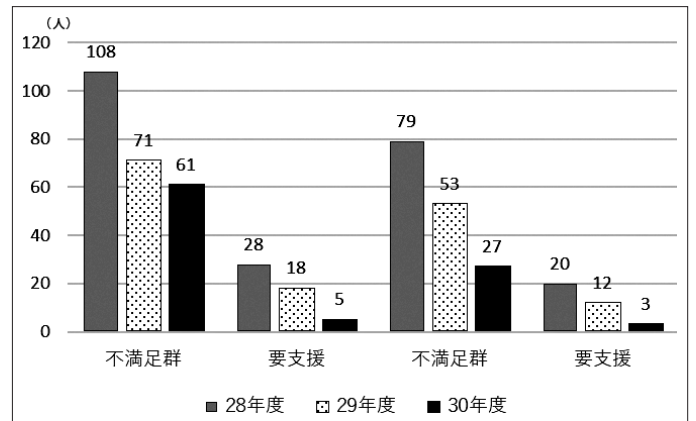


図2 学級生活不満足群と要支援群の変化

(2) 欠席者数の減少から

図3は、平成27年度から令和元年5月までの、月ごとの欠席人数を示している。インフルエンザの流行や、気温の変化等により、条件は年によって異なるが、平成29年度から全体的な欠席数が減少している傾向が捉えられる。特に、6月と9月で欠席児童数が減少している。

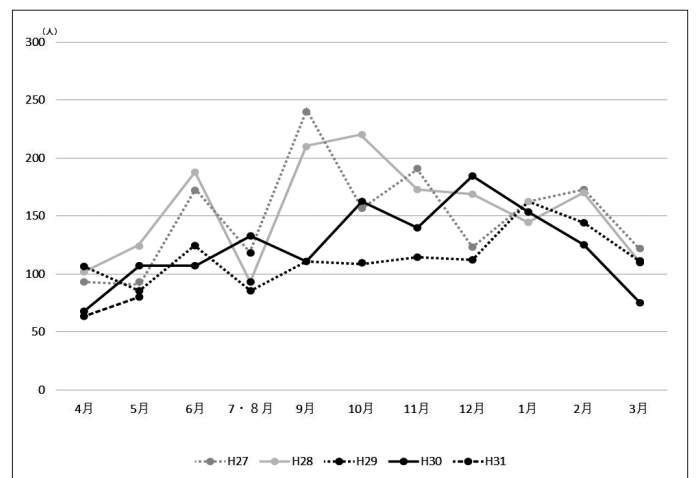


図3 月ごとの欠席延べ人数

(3) 学校評価アンケートから

本校では、児童を対象に学校評価アンケートを実施している。次ページ表1はその結果の一部である。「学校は楽しいですか」「先生は悩みや相談に応じてくれますか」という項目で、肯定的な回答の割合が高まっている。

【考察】

(1) 教師の見取りや教育技術の向上

Q-Uの実施と分析を年間計画として位置づけたこと

で、学校全体で共通理解を図りながらPDCAサイクルを回すよう意識することができた。

Q-Uの客観的なデータを生かすことで、教師の見取りの質や、状況に合わせて対応する教育技術が向上し、子どもたちの「先生は自分のことを気にかけてくれる」「学校に行きたい」という気持ちの高まりに、少なからず影響を与えていると考える。

(2) 教師の意識の変化

学校全体で学級集団づくりの共通理解を図り、その一つの手法としてSGEに取り組んだことで、「子どもが誰とでもペアやグループを組めるように考える」「原案を学級の実態に応じて工夫する」など、教師がハッピータイムの効果を実感し、意欲的に取り組もうとする姿が見られた。SGEをきっかけとして、子どもたちに寄り添い、よりよい学級づくりへ向かう意識が高まってきている。

(3) 学習意欲の高まり

学校評価アンケートの「進んで学習していますか」の項目では、「とてもよくあてはまる」と回答する児童の割合が増加し、成果が見られた。学級集団づくりに取り組み、「共に創り上げる」授業を研究してきたことが、子どもたちの学習に対しての前向きな姿勢につながっていると考える。

(4) 今後の課題

学級満足度の高まりは見られたものの、標準学力調査（東京書籍）の結果を見ると、大きな数値の高まりは見られなかった。親和的な学級風土を土台として、インクルーシブ型学級へと継続しながら、子どもたちの学力を高めていくための授業力向上を大きな課題とし、今後の教育活動に取り組んでいきたい。

表1 学校評価アンケート結果より（一部抜粋）

「学校生活は楽しいですか」	H28	H29	H30
とてもよくあてはまる	63.2%	66.7%	70.5%
だいたいできている	28.3%	25.7%	24.5%
あまりできていない	7.1%	5.2%	3.9%
ほとんどまたは、まったくできていない	1.4%	2.4%	1.1%

「先生は悩みや相談に応じてくれますか」	H28	H29	H30
とてもよくあてはまる	76.4%	77.3%	81.0%
だいたいできている	16.0%	17.3%	13.8%
あまりできていない	4.2%	3.8%	3.9%
ほとんどまたは、まったくできていない	3.4%	1.6%	1.3%

「進んで学習していますか」	H28	H29	H30
とてもよくあてはまる	39.3%	40.1%	48.0%
だいたいできている	46.6%	47.6%	39.2%
あまりできていない	12.2%	10.3%	12.0%
ほとんどまたは、まったくできていない	1.9%	2.0%	0.8%

TEPRO Supporter Bank 人材登録のお知らせ

一般財団法人「東京学校支援機構」が昨年7月に発足し、令和2年1月14日から、インターネットで登録申し込みを受け付けています。

3月24日、日本スクールカウンセリング推進協議会として団体登録をしました。

ガイダンスカウンセラーだけでなく、所属団体の資格で個人登録ができますので、TEPRO（ティープロ）ホームページをご覧ください。

<https://www.tepro.or.jp>

主な活動内容として〔部活動支援、教職員の事務支援、学習支援、特別支援教育、心理・福祉の支援、ICTの支援、日本語指導、その他の支援（講師と産休育休代替教員は除く）〕があり、求人内容は〔有期労働、パートタイム、有償ボランティア、無償ボランティアなど〕です。活動場所は、東京都の公立小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等学校、特別支援学校（2,142校）が対象です。

都内在住者だけでなく、通勤可能ならば近県の方も登録できます。

知識や技術を活かしたい方、空き時間を活用して柔軟に働きたい方、現役・退職者を問わず、社会に貢献したい方、支援を必要としている学校を紹介していただけます。

教育カウンセリングCollege 研究実践発表会in 秋田 参加者感想アンケートまとめ

日本教育カウンセリング学会
秋田県教育カウンセラー協会

◇日時：2020年2月9日(日) 9:20～16:20

◇会場：秋田市民交流プラザ アルヴェ 洋室C

◇参加者：41名

◇スーパーバイザー（指導助言者）：

伊佐貢一先生（日本教育カウンセリング学会研究委員長、魚沼市立湯之谷小学校校長）

藤村一夫先生（日本教育カウンセリング学会常任理事、滝沢市立滝沢第二小学校校長）

荻間澤勇人先生（日本教育カウンセリング学会事務局長、会津大学文化研究センター教授）

◇発表内容

氏名（所属）	発表テーマ	S V
奈良恵子 (A県・公立 高等学校)	女子中学生に対する不登校克服を目指した支援～管理職としての支援体制づくりと援助活動～	伊佐貢一
工藤吉猛 (D県・中等 部・高等部)	高校1年女子を対象とした構成的グループ・エンカウンターによる自己肯定感変容の検討	荻間澤勇人
中村祐子 (B県・スクールカウンセラー)	死ぬ方法を知りたいと訴える女子中学生への対応—援助方法を統一したチーム援助による介入—	藤村一夫
佐々木雄一郎 (C県・公立 小学校)	全校一斉で実践するSGE～ハッピータイムの取組をとおして～	藤村一夫
保泉朋子 (A県・聴覚 障害者情報提 供施設)	スクールソーシャルワーカーを活用した地域資源との連携について	伊佐貢一
佐藤健吉 (A県・公立 中学校)	初任者研修における校内研修プログラムの実施—中学校道徳科の授業実践に対する効力予期の高まりを目指して—	伊佐貢一
藤谷淳一 (A県・特別 支援学校)	特別支援学校における不登校支援の現状と課題について—A県B支援学校における不登校調査から—	荻間澤勇人

◇アンケート集計結果（アンケート回収数：31部）

1. Collegeの開催時期について

①よかった（26名） ②違う日の開催がいい（3名）
未回答（2名）

2. Collegeの開催会場の環境について

①よかった（29名） ②不十分であった（2名）

3. 今後の教育実践に役立つ発表の有無

①あった（31名） ②なかった（0名）

◇Collegeに参加した感想（抜粋・以下同）

- いろいろな校種、現場の方々の実践をお聞かせいただき、大変勉強になりました。視野が広がりました。
- 多面的に見る、さまざまなアプローチの仕方等、学校現場で生かしたいこと、これから学びたいことがあり、有意義でした。
- さまざまな事例を聞くことができ、自分にできること、できないことを明確にする必要があると再認識できました。
- 生徒への対応、支援、同僚との組織的な取り組みなど明日からの校務に役立てたり、参考にしたいです。
- スーパーバイザーの助言、指導が大変勉強になりました。
- 多様な素晴らしい実践と、裾野を広げる取り組みが行われていることを思い、感無量です。高齢でリタイアを考えたりしていますが、秋田の研修にまた参加して、老化と闘いたいです。
- 今回は、発表テーマもさまざまで、他県の実践を秋田にしながら聞かせていただきました。大変得した気分です。少人数での話し合いも回を重ねるごとに話しやすくなりました。
- 発表する経験ができてよかったです。守秘義務等、難しい事例でしたが、11月の秋田大会に向かうことができました。
- 論文の書き方（実践の仕方、まとめ方、タイトルの工夫等）について学びました。グループワークができたこともよかったです。

◇今後の教育実践に役立つと思った発表

- ほぼ全てが参考になりました（特別支援学校での不登校支援、SSW、スクーリングクエスチョン、調査票、ハッピータイム（15分・エクササイズ）、管理職との支援体制など）。

◇今後希望する研修の内容について

- SGEの取り組みについて。（ジェネリック）SGE、教育分析。キャリア教育に焦点を当てたSGEの研修があると嬉しいです。
- 学校とスクールカウンセラーが連携した実践事例発表、今回のように緊急性の高い事例についての実践発表
- 東北でも（できれば北東北で）管理職セミナーのような研修があればと思います。

文責：荻間澤勇人
（会津大学文化研究センター教授）

学会活動報告

令和元年度

日本教育カウンセリング学会常任理事会 略報告

◇令和元年度第4回常任理事会

日 時：2020年1月12日(日) 11:00～

会 場：早稲田大学16号館605教室

出席者：河村茂雄，荻間澤勇人，岡田弘，小野寺正己，
加勇田修士，品田笑子，根田真江，藤村一夫，
水谷明弘，武蔵由佳，阿部千春

欠席者：伊佐貢一，松崎学，水上和夫，吉田隆江

事務局：高野七良見

○開会の辞

○理事長挨拶

はじめに、河村理事長より、新しい学習指導要領が小
学校から始まり、大きな変換期と思われるなかで、本学
会は社会的構成主義の学びの流れにうまく乗り、生き残
りを図って進めていきたいとの抱負が述べられた。

議事および報告

1 2019年度の研究発表(早稲田大学)大会の報告につ いて

○会計報告

- ・水谷大会準備委員長より、資料を基に、早稲田大会の
収支決算の報告がなされた。
- ・早稲田大会の運営について、最終的に学会からの補助
は1/4のみの使用となり、良好な運営がなされたこ
とが報告された。
- ・1日目は午後からの開催であったため、「遠方からも
参加しやすくなった」との声がある一方で、プログラ
ムが重なるために、希望するすべての企画に参加で
きない状況もあり、それについては課題であることが報
告された。

○第2回JSEC研修会の報告

- ・荻間澤事務局長より、資料を基に、第2回JSEC研修
会の実施報告がなされた。
- ・会場設備については、エアコンの故障によりネガティ
ブな意見が見られたが、研修内容については多くの好
評を得られたことが報告された。

2 2020年度の研究発表(秋田大学)大会の進捗状況に ついて

○一次案内について

- ・阿部準備委員より、資料を基に、第18回研究発表大会
の進捗状況の報告がなされた。
- ・JTBを介して参加申込の受付を進めていくこと、3月
月上旬に申込フォームが完成する予定であること、秋田
大学から情報交換会へはシャトルバスで送迎するよ
う手配を進めていることが報告された。
- ・荻間澤大会準備委員長より、記念講演のテーマと講
師、公開シンポジウムのテーマと登壇者についての確
認がなされ、承認された。

○第3回JSEC研修会について

- ・荻間澤事務局長より、資料を基に、第3回JSEC研修
会の進捗状況の報告がなされた。
- ・「実践研究論文の書き方-3-事例論文の書き方-」と
いう内容で、大会前日(11月21日)の午後に開催す
ること、会場や講師等の情報が報告された。また、案
内は一次案内と同封する予定であることが報告され
た。

3 各委員会から

① 総務委員会

○「倫理規程」について

- ・小野寺総務委員長より、倫理規程はとくに編集委員
会で必要とされているため、武蔵編集委員長に依頼を
し、その原案が出来上がっていること、次回の常任理
事会で内容の確認をお願いする予定であることが報
告された。

○「会費の値上げ」について

- ・小野寺総務委員長より、資料を基に、本学会の年会
費が他学会と比べてかなり安価であり、学会運営をし
ていくことがむずかしい状況にあることが報告された。
また、現時点での2019年度の会費を納めている学会
員数と学会運営の経費を併せて考えると、会費は5,000
円もしくは6,000円が妥当ではないかとの意見が述べ
られた。
- ・河村理事長より、学会運営における会場費等を鑑み
ると、会費3,000円で進めていくには限界がきており、
6,000円まで上げてよいのではないかと意見が述べ
られた。会場として早稲田大学が使用できなくな
ると、運営が苦しくなるのではないかと意見が述べ
られた。
- ・藤村理事より、正当なやり方では3,000円では運営で
きないので、値上げとなっても仕方ないのではないか
との意見が述べられた。



- ・ 荏間澤事務局長より、3月の常任理事会で再度議論をし、5月の理事会および総会で提案することが確認された。

○「選挙細則」の変更について

- ・ 小野寺総務委員長より、資料を基に、学会員数における役員数の割合を本学会と他学会で比べたところ、本学会については他学会と同程度であることが確認された。

① 地方理事がこの学会に実際にコミットするのは理事会の日のみであること

② 地方理事は協会の地方支部の先生から推薦をいただき、地方理事候補者となっているが、実際の選挙では定員分しか候補者がいないため、無投票で当選という状況になっていること

が報告され、①②を踏まえて本学会に地方理事は必要なのかを常任理事にご協議いただいたほうがよいのではないかと意見がなされた。

- ・ 荏間澤事務局長より、地方理事という名目だが、本学会には支部がないこと、年1回の理事会で交通費の支出があることが確認された。

- ・ 小野寺総務委員長より、学会には地方支部はないが、学会の活動を広く知らしめるために、地方で中心的に頑張っている学会員を入れて活動を進めるという考えもあるのではないか、一方で、ニュースレターを見ると、各支部の運営がむずかしい状況にあることも確認できたとの意見が述べられた。

- ・ 荏間澤事務局長より、研究発表大会を運営できる支部がほとんどなくなった状況であることが報告された。

- ・ 荏間澤事務局長より、3月の常任理事会で結論を出すことにし、地方理事14名をなくすかどうかを検討していくことが確認された。

② 編集委員会

○『教育カウンセリング研究第10巻』の発行と、『教育カウンセリング研究第11巻』の査読状況について

- ・ 武蔵編集委員長より、第10巻については、資料論文が1本、実践報告論文が3本、ショートレポートが1本の5本で発行作業を進めていることが報告された。第11巻については、原著論文が2本、実践報告論文2

本が審査中であることが報告された。投稿数が少なくなっていることから、論文の投稿を期待する由が述べられた。

③ 研究委員会

○「教育カウンセリングcollege in 秋田」について

- ・ 伊佐研究委員長が欠席のため、荏間澤事務局長より、資料に基づいて報告がなされた。発表者が7名、参加申込者が16名であり、引き続き、広報を進めていくことが確認された。スーパーバイザーとして藤村理事、荏間澤事務局長が参加することが確認された。

○「公開講演&シンポジウム」について

- ・ 荏間澤事務局長より、資料を基に、第14回公開講演&シンポジウムの進捗状況が報告された。
- ・ 「人生100年時代のキャリア発達を支える教育カウンセリング」のテーマで進める、3か年計画の2年目に入り、第14回は「困難を抱える子どものキャリア発達」のサブテーマで進めていくことが確認された。
- ・ 公開講演講師およびシンポジウムの話題提供者が報告され、承認された。

④ 広報委員会

○広報の発行状況について

- ・ 加勇田広報委員長より、57号が12月20日付で発行され、58号は4月1日に発行予定であることが報告された。新しいHPについても準備が進められていることが報告された。

4 その他

○入会・入金状況について

- ・ 9～12月の入会希望者（6名）の入会が承認された。
- ・ 2,467名中1,823名より2019年度会費の納入がされており、2回目の督促により納入状況が改善されたことが報告された。2020年度の会費の請求を3月に行う際に、2019年度の会費の督促も行うことが報告された。

◆各講座中止のお知らせ◆

日本教育カウンセラー協会、日本教育カウンセリング学会、日本SC推進協議会が開催を予定しておりました、講座、シンポジウム、研修等は、新型コロナウイルスの影響を鑑み、7月末まですべて中止となりました。

NPO法人日本教育カウンセラー協会 〒112-0012 東京都文京区大塚1-4-15 アトラスタワー茗荷谷3F
TEL : 03-3941-8049 FAX : 03-3941-8116 E-mail : jim@jeca.gr.jp URL : http://www.jeca.gr.jp

日本教育カウンセリング学会 〒112-0012 東京都文京区大塚1-4-15 アトラスタワー茗荷谷3F
TEL・FAX : 03-3941-0213 E-mail : jsec.jimu@gmail.com URL : http://jsec.gr.jp/

教育カウンセラー第58号 2020年4月20日発行

発行人 河野義章 編集 JECA広報委員会（加勇田修士、池場望、吉田隆江、楠元奈津子）

JSEC広報委員会（加勇田修士、水谷明弘、松崎学）

印刷 スピックバンスター株式会社